

あたりまえのこと

あたりまえのこと

昭和三十三年三月三十日 發行
昭和三十三年五月十五日 三刷

定價 貳百參拾圓

地方
實價 貳百四拾圓

著 者 臼 井 吉 見

發行者 佐 藤 亮 一
東京都新宿區矢來町七一

印刷者 塚 田 重
東京都千代田區神田神保町

發行所 株式會社 新潮社
東京都新宿區矢來町七一

電話東京三四局代表七一(八)
振替東京八〇八番

(佩丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。)

印刷・塚田印刷株式會社 製本・神田加藤製本所

©Y. Usui Tokyo, 1957. Printed in Japan

目次

薄弱な精神風俗

進歩的文化人……………	七
恐るべき言葉……………	一九
「病的症候」をめぐる論争……………	二三
戦中派の発言……………	二三
国会の小説論議……………	三三
ソ連のリアリズム……………	三四
指導者の反省……………	三六
党員文学者の責任……………	三九
新聞記者の中国拝見……………	四一
薄弱な精神風俗……………	四四
感傷的な風景……………	四六

さまざまな役者	四九
ワラジばきの英雄	五一
勤皇教育の基地	五四
山中湖畔の村	七三
巢鴨ブリズン	七セ
内　　灘	八〇
「旭ヶ丘」の白虎隊	九三
現代の学生	一〇六
教育の甘ったるさ	一〇
国語、国字の問題	一一三
英語の義務教育	一二五
教育を知らぬ教育者	一二七
中国見本市見物	一二三
立正交成会	一二六
「戦力なき軍隊」の若者たち	一三〇
婦人雑誌を切る	一三九
「選挙公報」採点簿	一四八

良書と悪書

良書と悪書……………	一五三
すぐれた一冊に味わう楽しみ……………	一五七
芸術に未成年はない……………	一五九
マス・コミに乗る文学……………	一六三
中間小説誌の役割……………	一六六
うまい作家・まずい作家……………	一六八
或る日の新聞小説についての報告……………	一七二
モデル問題は非……………	一八一
『太陽の季節』論争……………	一八三
作家と文学賞……………	一八六
秀才文学の流行……………	一八八
架空文壇内閣評判記……………	一九三
一九五一年の文壇十大トピック……………	一九六
時評的書評……………	二〇一
人間の生き方(二〇三)枕頭からアクセサリへ(二〇四)結婚は必要か(二〇五)	二〇二

さかさまの世界 (三〇〇) 女の生き方 (三二) 悪党のいないクレープター (三三)
実業家の人生観 (三三) 魯迅と平和論者 (三七) スターリン・二つの伝記
(三九) アメリカ論 (三三)

某月某日

..... 三四

深刻な事情 (三四) 三本だての映画 (三六) 盲点 (三七) 新権力政治 (三九)
フルシチョフ演説の反響 (三三) 桜桃忌 (三三) 牛歩戦術 (三五) バランス
(三六) ドストエフスキの記念祭 (三七) フラカード (三九) アブレ・ゲー
ルの終焉 (四〇) 亭主の脅威 (四一) 見当はずれのこと (四二) アメリカの
日本観 (四三) 鳥のこえ (四四) 冷酷な天才たち (四五) 『改造』にこそ寄せ
て (四六) 清新強力ということ (四七) 十六ニュース (四八) 慰藉料 (四九)
変態読書 (五〇)

装幀 中野謙 二

あたりまえのこと

「進歩的文化人」

『世界は変った』という、ソ連、中国見学記を書いた石川達三氏に、まっさきに「噛みついた」のが、ぼくだそうだ。『週刊読売』によれば、そういうことになっているらしい。しかし、これは思ひすぎしといわなければならない。あれは、噛みつくほど、手応えのあるものではなく、むしろ、その逆といっていゝものだ。噛みつくこうにも、噛みつきようのないところが、石川氏のあの感想の特質というべきものであらう。そのくせ、あれは、日本のある種の知識人の、ものの考えかたの、極度に誇張された一見本と考えられるところがあり、そこに、ぼくとしては、すくなからぬ関心を抱いている。石川氏個人としては、もともと、割りきった考えかたの身についたひとであり、何ごとに対しても、疑問や不安をもたず、仮にもったにしたところで、それを深めることをせず、たゞちにそれを常識化し、結論化するといったたちの作家だ。そこにまた、石川氏の通俗小説家としての強味があるわけだ。今度のことも、いかにも石川氏らしい発言だとすましてしまえば、それだけのことだ。だが、こゝに日本の知識人特有のタイプが、異常に拡大されて示されているということになれば、この単純な事実は、途端に、複雑な様相をおびざるをえないわけである。

石川氏の見学記のもつ、第一の特色は、無限定、無原則なソ連、中国の肯定、礼讃ということだ。それも、単なる肯定、礼讃でなく、日本が、よってもって範とすべきものとしての、無条件の受け入れということだ。民族の伝統と、国家の条件や組織の根本的にちがっているところから、当然おこりうべき疑問、不安、拒否の精神反応が、まったく見られないこと、しかも、できあがったその成果だけが目に映っているということだ。

成果をもたらずまでの、目に見え、もしくは、目に見えぬ、はかり知れぬ苦しみと犠牲、ソ連についていえば、革命四十年の苦難の歴史、国内戦につゞきスターリンの独裁と粛清の二十年をふくんだ歴史と切りはなして、成果だけを見ようとする。中国でいえば、すくなくとも阿片戦争以来百年に及ぶ屈辱と反抗、混乱と頹廢の歴史とは独立に、現在の建設だけを眺めている。そして、あたかも忽然として、革命による花園でも開けたかのような礼讃ぶりは、大きな苦難に生きぬいてきた彼の国の人民に対しても、失礼であろう。

石川氏は革命の本質をぬきにして、革命を語っている。革命が必然的に支払わなければならない莫大な犠牲については、とんと考えてみたこともないらしい。いや、新中国について語ろうというのに、かんじんの革命を語ろうとしない。共産主義といえば、日本人はすぐ革命を考えるが、共産主義にとって、革命が問題なのではなく、建設こそ問題だ、などとたわけたことを吐きちらしている始末だ。革命という言葉だけは覚えていても、その辞書的な意味すら知らないものにむかって、革命を論ずるわけにはいかない。ともかく、世界が社会主義の方向に歩んでいること、将来とても、おそらくこの方向以外に進路のないだろうことは、もはや、こんにちの常識といっていふだ

らう。とりわけ日本の現状からすれば、この方向においてするほかには、どんなちっぽけな問題すら解決できないにちがいない。社会主義の最低度の要求すら、なんらかの革命を考えなければ、とうてい実現できそうにはない。しかも、独立の名において、独立を奪われている日本が、どのようなかたちにせよ、革命を実現することなど、目のくらむような絶望感を伴わずに考えられるものではない。重大な異変でもおこらぬかぎり、国家権力の奪取が、やすやすと行われでもするかのような考えは、痴人の白昼夢にすぎない。問題は、革命ではなくて、建設だ、などと日本の知識人が正気で言っているとすれば、呆然とするよりほかはなからう。

いかに進歩派であらうと、こんにちそれを望めば、明日にでも実現できるような、晴々しい表情で、革命を論ずる日本人があらうとは思われないのに、革命など問題ではない、問題はその後における建設だなどと言ひ出されたら、誰にしたところで挨拶のしようはあるまい。戦争と並んで、もっとも強烈な破壊的エネルギーを有する革命を、とりわけ、日本のおかれている現状において、一片の抵抗感も、絶望感も伴うことなく、やすやすと口にすることはほど奇怪なことではない。進歩派であらうと、なからうと、ぼくは、そういう人間を頭から信用できない。

もっとも、日本の知識人にせよ、進歩派にせよ、石川達三氏をその代表あつかいにしたら、迷惑にちがいない、おそらく苦笑するほかはなからう。だが、くりかえし、ぼくの言いたいのは、かれらの多少の迷惑にもかゝらず、石川達三氏の場合こそ、日本のいわゆる進歩的知識人の精神構造を、極大に拡げて見せてくれているということだ。これほど、あけすけに、露骨なかたちで、それを示してくれたものは、ほかにはなかった。

ぼくは、こゝで、石川達三氏ひとりをあげつらうつもりは更々ない。進歩的知識人の滑稽化された雛型として、いさゝか観察してみようというのだ。

外来文明に対して、なんらの抵抗をも示さず、したがって、また、なんらの絶望感にも襲われることなく、そのまゝ、これを受け入れるようになったのは、明治二十年代以後にはじまったものと見ていふだろう。維新以後、十年代は、新国家の基礎条件を決定する必要からいっても、あれも、これもと、無原則に、とり入れるわけにはいかなかった。当然、選択が行われなければならぬ道理であった。日本の国家、日本の社会のありかたをきめる決意に即して、それが実行されざるをえない事情にあったこと、いうまでもない。決意して、とり入れたもの、たとえば、自由民権思想にしたところで、ついには、新国家の権力によって蹂躪されざるをえなかったことは、誰でも知っている。藩閥による新政権は、反革命を征伐することによって、みづから反革命の方向に、新国家を組織化した事情についても、周知のとおりである。

明治二十年初頭において、欽定憲法によって、国家組織の根本を決定し、教育勅語によって、国家イデオロギーを決定して、近代偽装で身を鎧った封建国家を確立して以来、これらの根本に抵触しないかぎり、どんな外来思想であろうと、おかまいなしの、さかんな紹介、輸入がはじまったのだ。こちらにないものは、何であろうと取揃えようというのである。だが、近代思想であるかぎり、こういう国家組織と相容れるはずがない。こういう国家組織の存続を許さず、これを破壊せずにはおかなかったのが、ほかならぬ近代思想というものだ。そこで、それらの思想の根本を骨ぬき

にし、こちらの国家組織と矛盾しないものにして、とり入れたのであった。それどころか、逆に、それらを質的に転化せしめて、確立した国家組織を強化するものに、役立てたことを忘れてはなるまい。たとえば、自由民権思想が、どんな質的变化を遂げて、天皇制国家の強化に役立ったか、疑うものは、徳富蘇峰の生涯を思い浮かべるだけで充分だろう。ギリスト教にしろ、科学思想にしろ、この事情において、変りはない。

このことに抵抗を感じ、疑問をもったものは、内村鑑三、北村透谷、石川啄木、その他二三の特殊な信仰家、文学者にすぎない。

たとえば、北村透谷は、明治二十六年に書いた『明治文学管見』において、国家の組織そのものに即し、政治と倫理との関連において、「精神の自由」の根柢から、日本文学史を照し出そうとの抱負を示している。(一)快楽と実用、(二)精神の自由、(三)変遷の時代、(四)政治上の変遷という構想によっても、このことは、ある程度推察できよう。この場合、(一)は当面の問題にかゝわりがないからではなくとして、(二)においては、人生の本義は、「精神の自由」に存することを明らかにして、これと、日本の政治的、ならびに宗教的組織との関係を考察しているのである。いずれ、他日、「日本文学と国体」との関係について論ずるつもりだが、いまはたゞ、「日本の政治的組織は、一人の自由を許すといへども、衆人の自由を認めず、而して日本の宗教的組織は、主観的に精神の自由を許すといへども、社会とは関係なき人生に於て、この自由を享有するを得るのみにして、公共の自由なるものは、この上に成立することなかりしといふ事を断り置くのみ」と言っている。精神の自由を欲求するのは、人生の大法であって、最終の目標は個人の自由だという。「日本人民の往かんと欲する希

望いづれにかある、愚かなるかな、今日に於て旧組織の遺物なる忠君愛国などの岐路に迷ふ學者、請ふ、刮目して百年の後を見ん。」というのが、この項の結語である。

(三)においては、いまや「変遷トランジションの時代」であり、われわれは相敵視する二大潮流の逆巻くなかにいると論じている。二大潮流とは何か。その一は、「公共的自由を経験と學理とによりて確認し、且握取せる共和思想」であり、その二は、「長上者の個人的自由のみを承認して、国家公共の独立自由を知らず、經驗上にも、學理上にも、国家には中心となりて、立つべきものあるを識れども、各個人の自己に各自の中心あることを認めざる族長制的思想」である。一言にして言えば、一方は西洋近代思想であり、他方は、東洋封建思想であるが、この思想的混乱のなかに、國民を率いるものに、福沢諭吉と中村敬宇のふたりがいる。だが、福沢は大改革者ではあるが、外部の改革であつて、國民の理想を嚮導するものとはいえない。中村は、改革者というよりは、適用家であり、保守家としての偉丈夫ではあるが、かれのなかでは、旧世界と新世界とは奇異な調和を保っているにすぎない。

最後に、(四)において、「民権という名を以て起りたる個人的精神」は、旧組織を破砕し、旧制度を撃破しつくさなければ満足することができない。一方、國民の自由を保護すべき武器として、言論、集会、出版などの勢力、ようやく増大しつゝある。明治政府は連合体より、単一体に赴こうとし、表面は堅固な組織のごとくであるが、その実、きわめて不安定な国体であることを論じている。

『明治文学管見』は、岩波版透谷全集による標題であつて、もともとは、『日本文学史骨』であり、

その一部としての『明治文学管見』であったように、日本文学の歴史的展開を考察するという、大規模のもくろみであったらしいが、明治文学の序説ぐらいのところで、中絶のまゝになっており、明治文学の作家、作品についての具体的な批評にまでは及んでいない。しかし、全体として、近代文学の主體的な基盤と条件とを明確にした点において、自由と民権の立場から、文学と近代的倫理との結合を求めて、文学と政治との内面的根柢的な連関を見出そうとした点において、画期的な評論であった。

啄木もまた、いわゆる大逆事件の前年、明治四十二年十一月、『きれぎれに心に浮んだ感じと回想』のなかで、「自然主義者は、何の理想も解決も要求せず、在るが儘を在るが儘に見るが故に、秋毫も国家の存在と抵触することがないのならば、其所謂旧道德の虚偽に對して戦つた勇敢な戦も、遂に同じ理由から名の無い戦になりはしないか。従来及び現在の世界を觀察するに當つて、道德の性質及び發達を国家という組織から分離して考える事は、極めて明白な誤謬である。——寧ろ、日本人に最も特有なる卑怯である。」と言っている。

一方では、国家の組織を絶対不可侵のものとしておき、他方では、外来のもろもろの近代思想を、最小限国家組織に抵触せず、むしろ、それに適合し、その一その強化に役だつよう、質的に變形して、次々に迎へ入れるという、文明開化的風潮に對して、疑問を抱くあまり、文学と国體との關係に思いをひそめた透谷の考えが、どんなに卓抜であつたかは贅言を要しまい。

抵抗と拒絶と選択のないところに、自主性の自覚はありやうがない。自主性の自覚のないところ

には、さいわい、絶望もない。新奇なものの紹介の人におくれをとることだけが、最大の関心事だったのだ。そういう、文明開化的な雰囲気は、ついに改まるときがなかったのだ。そこからもたらされた、根の浅いゆがんだ文化の性格に対して、まっ暗な絶望感を覚えずにはいなかったものに、夏目漱石がある。

漱石は、明治四十四年八月、和歌山市で行った『現代日本の開化』という講演で、自主的な能力を失って、精神の栄養をすべて外来のものに仰がなければならぬ日本の悲劇について、はげしい絶望感を吐露している。漱石の言葉でいえば、「外発的の開化」が、心理的にわれわれに与える影響は、新しい波が寄せるたびに、自分がそのなかで居候をして気兼ねをしているような気持にならざるをえない。ようやくの思いで脱却した旧い波の特質やら、真相やらを弁えるひまのないうちに、次の新しい波が寄せてくる。食膳に向って、皿の数を味わいつくすどころか、元来どんな御馳走が出たか、はっきりと眼に映じない前に、もう膳をひいて、新しいのを並べられたと同様だというのである。こういう「外発的の開化」の影響をうける国民は、どこかに空虚の感が、なければならぬ。また、どこかに、不満と不安の念を抱かなければならないはずのものだ。それを、得意でいる人は、よほどハイカラで、虚偽で軽薄な人間だ。タバコを吸つても、ろくに味さえ分らない子どものくせに、さもうまそうな顔をしてみせるのと変りはない。一言でいえば、現代日本の開化は、上滑りであるということになる。しかし、それが悪いから、およしなさいというのではない。事実やむをえないものがある。涙をのんで、上滑りに滑って行かなければならない。日露戦争以後、一等国になったんだという高慢な声は随所に聞くが、気楽な見かたをすればできるものだ。で

は、どうして、この急場を切りぬけるかと聞かれても、自分には名案はない。できるだけ神経衰弱にかからぬ程度で、内発的に変化していくがよからうぐらいの体裁のいいことをいうよりほかに仕方がない。

漱石の講演の要旨は以上のごときものであった。透谷や啄木は、日本の国家組織、国体を変えないかぎり、近代的な倫理の生れようがなく、したがって、西洋流の近代文学の育つ余地のないことを証言した。漱石は、自主性を失った輸入文化のなかにあって、絶望的な空虚感を告白した。

しかし、漱石の多くの門下たちで、師匠の抱いたような空虚感に襲われたものは、おそらくひとりもいなかった。この空虚感と焦燥感とは、漱石を神経衰弱どころか、一種の狂気状態にまでおとし入れたのであったが、その門下の秀才たちは、それらの事情とは、まったくの無縁であった。かれらは、海外のあらゆる新思潮を、次々にうけ入れ紹介した。かれらの理解にあまるものは、ひとつとしてなかった。あれもわかり、これも理解した。これを探り、あれを捨てるという決意は問題にならず、したがって、これを探るための焦燥や絶望に見舞われることからもまぬがれた。かれらは徹頭徹尾、享受者、紹介者として終始した。かくて、滔々たる文明開化の風潮は、どこまで行っても変りはなかったのだ。

こういう態度の前に、極度の寛容と楽天主義がもたらされた。拒否と絶望に代る寛容と楽天主義——大正期の文化が、いよいよ、こうした性格を強制されたことは当然であろう。

無論、知識人のなかには、外来文化の単なる紹介者、享受者たることを甘んじえないものもあった。文学者についていえば、永井荷風がそうであり、正宗白鳥がそうであった。だが、荷風の、へ